

令和5年度 愛媛県総合教育会議議事録

1 開会の日時及び場所

令和6年3月11日（月）午後4時00分

北宇和高等学校 北辰館1階 多目的ホール

2 出席者

愛媛県知事 中村時広

教育委員会 教育長 田所竜二 委員 関 啓三 委員 峯本陽子
委員 山内満子 委員 北須賀逸雄 委員 畠山千愛

3 会議の概要

(1) 開 会（午後4時00分）

（事務局 副教育長） ただいまから、令和5年度愛媛県総合教育会議を開会いたします。開会に当たりまして、知事から御挨拶をお願いいたします。

（中村知事） 本日は、令和5年度の愛媛県総合教育会議にお集まりいただきましてありがとうございます。

この会議は、地域の教育委員の皆さんが将来を担う子どもたちの教育を一緒になって、時代の変動要因も考えながら議論していこうという会ですけれども、今日は特にこの北宇和高校を会場に、生徒の皆さんや先生、それから公営塾の方々、また、鬼北町の教育委員会、町長さんにも出席をいただいております。限られた時間ですけど、どうぞよろしくお話ししたいと思います。

御案内のとおり、昨年、将来を見据えて、県立高校等の全県的な再編計画がスタートしました。いろんな意見がありましたけれども、生徒ファーストでより魅力的な学校を作っていこうということで、おおむね御理解をいただいているところですけども、本当に今日、北宇和高校でも、町の非常に強い思いを感じております。寮をまた新たに1棟建てるということも聞いていますし、また馬術部も拝見させていただきましたけれども、非常に力を入れられていて、県の方でも今度は馬場のスペースを拡大する後押しをさせていただこうと思っていますし、また本当に更にニーズが増えてきたら、一層の後押しをしなければならないなということを感じた次第でございます。

今日は、それだけではなく幅広い議題で議論したいと思いますので、最後までよろしく願い申し上げて御挨拶と代えさせていただきます。よろしくお話しします。

(2) 議 事

議題 「地域に根ざした魅力化の推進」

（中村知事） それでは会議を進めて参ります。本日は今少し触れました、地域に根ざした魅力化の推進を議題としております。

まず、北宇和高校から魅力化に向けた取組の紹介をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

(北宇和高校校長) 本日は、本校で総合教育会議を開催していただき誠にありがとうございます。また、先ほどは、教育活動を御視察いただき重ねて御礼申し上げます。

早速ですが、魅力化の取組を紹介させていただきます。

年度当初、魅力化コンセプトを策定いたしました。北辰、これは校歌に出てくる言葉で北極星のこと、英語でポラリスと言い、目標・信念・指標を意味します。魅来（みらい）とは、魅力ある未来、これを意味する造語になります。このコンセプトに基づく教育活動をイメージしたのが、前面にあるポンチ絵になります。教員間で共有することはもちろんのこと、各中学校にも配布し、本校の教育活動をアピールしました。

魅力化コンセプトのもと、教育活動を行った成果を御覧ください。一番の成果は、入学志願者が昨年度から18名増え、88名となったことです。宇和島市と北宇和郡の中学3年生の生徒数が、昨年度から50名減少している状況での志願者増加ということになります。特に県外志願者の増加が顕著で、これは町営寮が完成したことが最大の要因であると認識しております。

ここからは、生徒が取組を紹介いたします。

(北宇和高校生徒) ただいまから、北宇和高校の魅力ある取組を紹介いたします。

初めに、地域活性化に向けた活動です。

一つ目は、探究活動です。1年生は、「総合的な探究の時間」を用いて、地域の魅力発信のためのチラシづくりや、学校や地域の課題を解決するためのアイデアを提供する活動を行いました。2年生は1年生で取り組んできた内容を更に発展させ、グループごとに学校や地域の魅力を発信するための研究を、地域の方にも協力いただきながら行いました。また、研究した内容を、様々な方の前で発表し、アドバイスをいただき、よりよいものになるよう努めました。

二つ目は、鬼北町にぎわい塾です。この取組は、鬼北町主催の近永駅にぎわい創出プロジェクトの一環によるもので、近永駅周辺ににぎわいをもたらすためにはどうすればよいか、ということを目的に行われています。地域の方たちと高校生が一緒になって、課題解決のためのアイデアを出し合い、地域活性化を実現させようとするものです。この取組は、2年生の探究活動とリンクしており、様々な方から、にぎわいのあるまちづくりのノウハウや経験を御指導いただき、研究に生かしています。

(北宇和高校生徒) 三つ目は、サイクリングイベントの実施です。2年連続で地域と一緒に進めるサイクリングイベントを計画し、実施しました。今年度は土佐大正駅までの約50キロメートルをe-BIKEで走行

した後、予土線を利用して近永駅まで帰るというコースで実施しました。駅到着後は、地域の方々、サイクリング関係者と意見交換会を実施しました。来年度は、この2年間のノウハウを生かし、そして継続的なイベントとなるよう努力していきたいと思えます。

(北宇和高校生徒) 四つ目は駅前マルシェです。近永駅周辺を会場に、年3回開催され、本校からは吹奏楽部、生産食品科、公営塾、町営寮のメンバーが参加しました。初回は夏祭りと同様に行われたので、約2,000人が来場され、活気のあるイベントとなりました。2回目は12月に行われ、約1,300人のお客様に来場していただきました。3回目は昨日行われ、イベント列車が宇和島駅から高知の窪川駅まで走行し、駅周辺がとてものにぎわいました。

(北宇和高校生徒) 続いて、地域資源の利活用についてです。

この地域の伝統工芸品である泉貨紙の可能性を探り、絵本、コサージュ、ライトを制作しました。制作した絵本は、昨年、泉貨紙を取り上げた伊達博物館の企画展で展示し、ライトを伊達博物館の入口に設置しました。道行く人が足を止めて眺めたり、ライトの前で写真を撮ったりしてくださったと聞いています。さらに、今年度から始まった「ソーシャルチャレンジ for High School事業」の取組として、これまで取り組んできた泉貨紙の利活用に加え、馬と共にある学校としての魅力化推進と情報発信を行うことで、地域の未来を拓いていこうと考えています。

次に、公営塾です。現在3人の先生が、学習面のバックアップをしてくれています。部活動にも配慮があり、午後8時45分まで、指導を受けることができます。とても分かりやすく、丁寧に指導していただいています。また、悩み相談、各種イベントなど、生活を豊かにするサポートも行ってくれるところが魅力です。

(北宇和高校生徒) 最後に、特徴的な部活動です。

まず、馬術部です。馬術部は県内唯一の部で、競技力向上に努め、今年度は馬術選手権大会コンソレーション競技第3位に入賞しました。子どもから大人まで参加できるエンジョイライディングなど、校内外の様々な活動も行っています。また、小学生から高校生までが共に活動する鬼北町乗馬スポーツ少年団は、乗馬やポニーとの触れ合いなど、参加者に応じた指導を行っています。特に、ポニーとの触れ合い体験は町内のみならず様々な場所に出かけて実施し、好評を得ています。

(北宇和高校生徒) 続いて、レスリング部です。レスリング部は、今年度誕生しました。2年連続で、全国大会に出場するなど、全国に北宇和高校の名前を広めています。レスリング未経験の私が、厳しい練習を乗り越えて、入部10か月目にして初めて勝つことができました。馬術部と同様に、地域活性化のためにはなくてはならない部活動となるよう、努力していきます。

このように、北宇和高校では、学校の魅力化や地域の活性化のために、

多くの方々に御支援いただき、様々なイベントに積極的に参加しています。

(北宇和高校校長) 最後に、来年度の重点取組について紹介いたします。いずれも鬼北町の御支援をいただいで進めて参ります。

一つ目は、メタバースを活用した学校広報活動です。学校ホームページやインスタグラムではできない学校紹介にチャレンジします。株式会社ドコモビジネスソリューションズさんの御好意で、メタバースを今からお見せしたいと思いますので、まずは正面のスライドの方を御覧ください。

左下にある丸い薄いカーソルみたいなものを使って、アバターを操作します。まず、正面から入り、左右には、学校行事の写真がございいますが、まずは正面を見てください。

画面の視点も変えることができます。先ほど見ていただいた資料を今、投影しています。このメタバースに馬術部の活動の様子を掲載しておりますので、それを御覧になってください。本校に来ないと乗馬体験はできませんが、メタバースの世界でなら疑似体験ができます。疑似的な部活動体験を、まずは馬術部で行ってみました。御覧ください。後ろの視点に切り換えたいと思います。様々な部活動の疑似体験に応用できると考え可能性を探っていきたいと思っています。

それでは、今、皆様の御手元にあるタブレットを操作していただいて、写真を御覧ください。操作の説明はドコモビジネスソリューションズさんが対応しますので、是非とも2分程度の時間しかないですけど、操作していただけたらと思います。

それでは、もう一つ、メタバースを使って双方向のコミュニケーションを実演したいと思いますので、正面のスクリーンを御覧ください。聞こえますか。

(北宇和高校教員) 聞こえます。ここは農産加工室です。

(北宇和高校校長) はい、大丈夫です。分かるよ、分かるよ。それでは先生、お願いします。

(北宇和高校教員) はい、今ちょうどパンが焼けました。

(北宇和高校生徒) これが先ほど作ったメロンパンです。

(北宇和高校教員) では、今からメロンパン作りを実践してお見せします。これがパン生地です。パン生地を、まず丸めて。

(北宇和高校校長) 先生、手元を映してください。

(北宇和高校教員) 見えますか。綴じ目を下にくるくる、「の」の字を書くように回します。そうすると、さっきより小さい生地になるので。次、メロンパンの上のクッキー生地。

(北宇和高校校長) 先生、カメラの視線をもう少し手前に引いてください。そうです、そうです。

(北宇和高校教員) メロンパンの上のクッキー生地をめん棒で伸ばしま

す。

(北宇和高校校長) 目線をもう少し引いてください。顎を引いてください。はい。そうです、そうです、そこです。

(北宇和高校教員) 見えますか。

(北宇和高校校長) 見えますよ。

(北宇和高校教員) はい。こんな感じで。

(北宇和高校校長) もっと近づいてください。

(北宇和高校教員) 伸ばします。

(北宇和高校校長) いいですよ。

(北宇和高校教員) いいですか。

(北宇和高校校長) 大丈夫です。すごくきれいに映っています。

(北宇和高校教員) すごくきれいな丸い形ができました。メロンパンにはクッキー生地が乗っていると思いますけど、こんな感じでメロンパンの上のクッキー生地を乗せます。

霧吹きで水をかけて、グラニュー糖を付けます。この時、キノコのマッシュルームみたいな形にならないように、クッキー生地が上の方ではなくてしっかり被さるようにするのがポイントです。網目模様を付けます。小学生とやるときは、好きなように形を作っていいよと言っています。こんな感じで出来上がりです。

(北宇和高校校長) ありがとうございます。はい、こちらでもらいます。今のは、遠隔地で指導ができるということの実践をしました。目線を下げてねとか、もっと近づいてねっていうところです。

(中村知事) じゃあ、わざとやっていたのですか。

(北宇和高校校長) はい。今のを活用して、東京とか北海道のような遠隔地の生徒に対して指導ができるのかなと。これはもう基本的に学校紹介で使いたいと思っていますので、すごく可能性を秘めた取組だと私は思っています。楽しみにしててください。

重点取組の二つ目は、愛媛大学社会共創学部との連携ですけれども、今年度、鬼北町内の中学3年生と本校の2年生が、愛媛大学で社会共創学部の学生と交流活動を行いました。来年度は、この交流活動に加え、本校が社会共創学部と連携し、鬼北町の活性化プロジェクト、これに取り組んでいく予定です。

もう一つは、広見中学校との連携です。広見中学校が来年度から、ライフキャリア教育を推進する教育課程特例校になったことを受けて、地域の魅力を本校と共に発見・発信することになります。

以上、本校の取組でした。御清聴ありがとうございました。

(中村知事) どうもありがとうございました。それでは、ただいま御紹介いただきました北宇和高校の取組も踏まえまして、地域に根ざした魅力化の推進について、意見交換をしていきたいと思っております。委員の皆さま

ん、どなたからでも結構ですので、自由に御発言をお願いします。いかがでしょうか。

(山内委員) はい、すみません。では、全国募集の推進について意見を述べさせていただきます。

全国募集の実施校においては、地元市町から手厚い支援を得ながら生徒募集を行っていて、県内生徒にとっては、多様な価値観、広い視野の獲得、県外生徒にとっては愛媛の恵まれた環境のもと、一人一人を大切に育てる教育で成長し、地域にとっては地域活動の担い手の増加となって、高校にとっては教育活動の充実、部活動の活性化に直結するなど、様々な期待がされています。

また、全国募集開始後の平成31年4月の県外入学生徒数は11名であったところ、「えひめ高等学校全国募集促進事業」開始後の令和4年4月には70名となり、令和5年4月には88名と更に増加しました。

また、県教育委員会が実施した他県調査において、県外入学生徒数の全国順位も本事業開始前の5位から2位となるなど、着実に成果を上げています。

これを踏まえて、今年度からは、これまで夏季に実施していた学校見学バスツアーを秋季に実施する他、SNSを活用した情報発信もエリアを拡充するなど、積極的な募集活動を展開しており、引き続き、県外入学者数日本一を目標に全国募集活動を促進して欲しいと思います。以上です。

(中村知事) はい。いかがでしょうか、教育長。

(田所教育長) はい。今、山内委員がおっしゃったとおり、全国募集に本当に力を入れ始めて今年で3年目4年目になりますか。おかげさまで、全国5位から全国2位まで躍進して、今年も今のところの速報値ですけど、おそらく110名は超してくるだろうというところで、もうひと伸び期待しています。合格発表はまだなので、はっきりしたことにはなりませんけれども。

今年、鬼北町さんの方で、また第二寮を作ってくださいますが、第二寮ができますと、また全国から来やすくなるだろうと。さらに、砥部分校とか、弓削高校も今度作ってくださいますし、住環境さえきちり整えれば、愛媛県の高校は魅力のあるところがいっぱいありますので、この勢いを持って、全国1位を視野に入れて頑張っていければと思っています。

(中村知事) 愛媛県自体が、東予・中予・南予と、ある意味では産業構造で分かれているといっても過言ではないと思うのですが、それがうまくバランスがとれているのが魅力であって、これまで教育現場、学校もそうですけど、一律に捉えがちだったのを、もっとその地域の特性・魅力というのをうまく昇華して、それを学校の魅力化に結びつけていくことが、一つ重要なのではないかなと個人的に思っております。

そういった中で、もう本当に生徒が減って、危機感を抱いた地域においては、かなり早い段階から取組を進めていて、成功例で言えば水族館部の活躍で全国から来るようになった長浜高校。それから特に好循環をしているのが三崎高校。もう本当に環境学習とかそういったところに起点を置いていますけれども、県外から来た生徒たちがみんな東京まで行って、呼びかけを行うとかですね、非常にアグレッシブな行動で、循環していくという拡大基調に入っていく。それに続いて、この北宇和高校の馬術部であるとか。一時、砥部分校でも募集停止という、他の高校との統合ということを打ち出しましたが、ともかく地域が是非やりたいと、ただやりたいって言ってもらちが明かないので、ゲームとデザイン科との民間会社を巻き込んだ新しいコースを設定して全国に募集をかけると。鬼北町と同じように町営で寮を作るという意気込みを持って臨み始めていますので、そういったところから、危機感の強いところの地域が行政と学校が一体となって取組を始めていますので、大いに期待ができるのではないかなと。

県の立場ではその後押しをする、徹底的に。前向きな発想でやろうとしているところを徹底的に後押しするっていう体制を作っていきたいなと思っています。よろしいでしょうか。

(教育長) 生徒さんの中で、何か。

(中村知事) 今のお話聞いて、誰か。何でもいいよ。

(教育長) 全国から来ている人がいらっしゃいます。

(北宇和高校生徒) 自分は両親に県外で進学することを勧められ、「地域みらい留学」のホームページで母と一緒に探していたところ、愛媛県の主催するバスツアーを発見して、この学校に来校して、他の徳島や岡山の学校も見ましたが、この学校の温かい、温もりのある環境というか雰囲気、新しい寮ができるということもあり、興味を持ってこの学校を受験しました。

(中村知事) 大歓迎。じゃあ誰か、更に増やすにはどうしたらいいか、こんなことをやってみたらいいのではないかという意見はありますか。

(北宇和高校生徒) この北宇和高校が地域に根づいた学校として、これからも地域と連携したイベントや魅力ある取組を多く発信していければいいと思います。それで、発信は今、SNSを通じて発信しているところもありますが、それとは別にテレビ局を通じてローカルで、愛媛県内にこの北宇和高校を伝えるだけでなく、知事さんは発信力がある方なので、是非、全国に伝わるようお力添えいただきたいと思っています。

(中村知事) 頑張ります。学校の先生、いかがですか。

(北宇和高校教員) 全国募集の担当をするようになって3年が経ちますが、やはり寮とか公営塾ですとか、本当に町から様々な支援があることで、こちらの方も自信を持って宣伝ができるようになりました。

あと「地域みらい留学」にも、鬼北町の補助で参加させてもらっている

ますが、その中でも全国のいろいろな方々とコミュニケーションをとる中で、僕の学校には興味ないけれども、その隣の学校に興味を持った方に対して自分が乗っかることができるという、そういう機会というのが結構あって、間接的ではあるけれども、少しずつ北宇和高校の名前が広がっているという手応えは、ちょっと持っている感じがします。ですから、来年以降も頑張りたいと思っております。

(中村知事) 本当に今日パッと見ても、鬼北町が頑張って町営寮を作られて、また新しく作るということも聞いていますし、あの環境というのはすごいなと思います。

だから、あそこのPRとそれからやっぱり本当に、レスリング部と馬術部が活躍していて、特に特色でいうと馬術部が国体のときの強化校だったので、そういった歴史もありますけれども、うまくプロモーションビデオを作ったら、あの動画を見ただけで思わず来たくくなるような子が出てくるんじゃないかな、特にポニーがすごくいい味を出してですね。あれをうまく編集したらいいんじゃないかなと思って。生徒さんたちの力を借りて、大体ITの操作とかは我々の世代は役に立たないケースが多くて、感性は若者の方があると思うので、そういう力も借りたら面白いものができるのかなと思いました。

(北宇和高校教員) はい。ありがとうございます。

(中村知事) それでは次に参りますけど、委員の皆さん、いかがでしょうか。

(島山委員) 先ほどから話題に出ていた、学校と家庭と地域の連携から、地域に根ざした学校の魅力化を図るには、やっぱり学校、家庭、地域がつながり合って、地域の声を学校運営に積極的に反映し、また地域へのメリットも還元しながら取り組んでいただくことが重要であると考えています。

今回の北宇和高校の取組を見ましても、学校側からもいろいろなことで地域に貢献をしているし、地域も学校の方に寮を提供したり、いろんなところで貢献して、両方がウィンウィンの関係であることがとても素晴らしいなと思います。

そうやって連携協働することによって、いじめとか非行など、子どもの問題行動や不登校などの教育課題の解決、教員の働き方改革、さらには、地域との関わりを通じて、子どもの地域への愛着や誇り、それを醸成することで、若者の地元定着等にもつなげられて、持続可能な地域社会を目指す上でも大変有効であると考えております。特に南予地域の少子化が激しくなっておりますので、こういった形で地元に着定していただけると、地域社会も持続的に続いていけると思っております。

学校側としても、社会に開かれた教育課程を目指すとともに、地域には学校へ歩み寄り支援する姿勢が求められるところであり、その部分をコーディネートするコーディネーター、学校と地域との橋渡し役、つな

ぎ役となる人材も大きな鍵と考えています。

(中村知事) 本当に今、人口減少問題は非常に大きな課題で、これを解決するには、出生率を上げていく取組を展開する。県外流出をどう食い止めるのかという視点で政策を考えていく。県内への人口流入をどう増やしていくかという視点も必要になってくる。そしてこれからは、おそらくというか、確実に、海外の人材をどう愛媛県に、といったことも考えて、そのために僕はインドにも行ったのですが、そういった四つの視点・柱で、人口減少問題に対峙していかなきゃいけないのですが、そのうち移住政策に結構結果が出始めていまして、6年前は1年間に愛媛県に県外から移住されている方が、年間260人ぐらいだったのですが、いろんな手立てを尽くして、対策を5年間打ってきまして、去年は7,200人まで増えています。今年度も7,300人くらい見込めるかなというところです。ちなみに他県を見てみると同じ四国でも、香川県が2,900、徳島が3,100、高知が1,700ですから、愛媛の7,200は突出した人数になっているんですけど、それだけ魅力がある、魅力があるっていうことは住みやすいつてことなのですが、やっぱりそれを知る人が少ない。地元にながら灯台下暗しでしかない。だから、今日の生徒さんの地域を知る取組が進むというのは、そういう意味では非常に大きな力になると思うし、そのために、今年度から「えひめジョブチャレンジU-15」の中学生対象の事業に加えて、「ソーシャルチャレンジ for High School」という地域と一体となって、場合によっては企業、その地域の企業と一緒に、地域課題の解決という高校生らしいチャレンジをしてもらう環境を後押ししようかなと考えています。

そういう時に、コーディネートする人の人材が非常に重要になってくるので、県の方ではそういったアドバイザーを、町と地域がやるときに派遣したりですね、それから地域おこし協力隊の方々などですね。割と愛媛県は地域おこし協力隊が全国から来ていますが、任期が終わった後の定着率が高いですね。だからそういったことを大事にしながら、人材を確保していきたいなと考えております。ということで、今日まさに公営塾の講師をやっている方に参加していただいているのですが、どうですか。

(公営塾講師) 私自身は、岡山生まれ岡山育ちなのですが、今年度、4月から来させてもらった理由というのが、愛媛県出身の学生と関わらせていただく、学生時代を過ごしたりとか、また社会人で教員をさせていただいたのですが、その間も、生徒の中に県外募集もあって愛媛県の子たちと関わる機会が多かったのですが、何ととっても温かい人柄のよさというか、そこら辺にすごく惹かれる面がありまして、先ほどおっしゃっておられた、一人一人を大切にされる教育がおそらく行き届いていたと思うんですけど、そこに惹かれて、ちょっと一度、愛媛県で教育を勉強したりとかというふうな気持ちがありまして、今回、愛媛県の方に来

させていただきました。

(中村知事) 来てみてどうですか。

(公営塾講師) もう本当に温かくて、何でしょうね、実家に帰ってきたような、それぐらい温かみ溢れる地域の方々と、学校の先生方もそうですし、地域の子どもたちも、すごくかわいらしくて元気がよくて、すごくいいなと感じております。

(中村知事) 他が冷たいといったわけではないのですが、特に愛媛でも南予地域は、突出した温かい空気がありますよね。ありがとうございます。それでは、次、いかがでしょうか。

(峯本委員) 社会に貢献する児童生徒の育成ということで、お話しさせていただきたいと思います。県教育委員会が人間環境大学総合心理学部と連携をしまして児童生徒の心と体の健康と人のつながりに関するアンケート調査を行いました。これはすべての公立学校の小学校5年生から、中学校2年生までを対象としたものでした。その結果を見てみましたら、自分を大切にするっていう、自尊感情、これについては高い傾向にあるのですが、自分が人の役に立っていないと感じているっていう子どもは36.4パーセントという割合でした。

社会に貢献できているっていう自信を持つことは、自分の力に自信を持って前を向いて自分の人生を切り開いていくことになるのではないかと思います。中村知事が県内オール愛媛という機運を醸成してくださっていますので、今日、北宇和高校で見せていただいた授業のように、生徒さんが、地域との連携ということをもっと深めていきたいと意見をくださったように、地域の課題解決に貢献していく、生徒が貢献していくような学習とか、そういうものを小学校段階から、巻き返し繰り返し、スパイラルのように、深めていくことによって、自分がやっぱり社会の役に立っていくと、そういうふうな思いを高めていってくれるのではないかと思います。知事の御意見をお聞かせいただきたいと思います。

(中村知事) 元々今の視点で起こした事業ではなかったのですが、やっぱり人口問題等々を考えた時に、県外に出ていってしまうお子さんの理由をいろいろ聞いてみると、地域のことを知らなかったが故に出ていってしまうケースが多分に多かったのですね。どんな企業があるかも知らない、どんな職業があるかも知らない。これを何とかしようとして立ち上げたのが、たまたま家でテレビを見ていたら、富山県の例が出てきて、どこの自治体でも職場体験は授業の中でやっているんですが形だけなんですよ。ところが、富山のやり方って非常に奥が深そうだなと思ったので、すぐに教育委員会にちょっと行って調べてきて欲しいとお願いして、いろんなことが分かってきて、それを愛媛バージョンでやりたいなっていうことで生まれたのが「えひめジョブチャレンジU-15」です。

最初、やっぱり学校の先生は非常に固いので、「中学生職場体験なにになに事業」とか言って、こういう名前では子どもたちは絶対振り向いてく

れないから、名前は「えひめジョブチャレンジU-15」で無理やり決めて、やっちゃったんですよ。

次に、ここはもう本当に5日間から7日間、今、県内の企業・職場が延べで4,500ヶ所ぐらい参加してくれています。それぞれの地域でいろんな体験をして、まず知るということです。これがジョブチャレンジです。高校生になってくると、ただ体験するのでは、先ほど話したように物足りないのではないかと。やっぱり課題解決という体験を外に出てやるということが、非常に成長につながっていくのではないかと思ったので、そこで生まれたのが、「ソーシャルチャレンジ for High School」。

実は今年度、順番が逆になってしまったのだけど早い方がいいのではないかということで「プレジョブチャレ」を小学生対象に行いました。だからそこで、地域と学校の接点をどんどん増やして、それがまた知ることによって、こういう社会でこういうことがあって、こういうことをやっているのだとか、こういうことで貢献しているんだということが実感できる。

高校になったら今度は自分が一員になったつもりで課題解決の経験ができる。さらに、小学生から、もう何でもいいからまず経験するというふうな、そのラインでできるようになったらより一層そういう思いが強まっていくのではないかなと考えております。よろしいでしょうか。

(峯本委員) はい。ありがとうございます。

(中村知事) 大学とも、もちろん連携していますから、現在四つの大学とお話ししまして、これからの新しい時代に対応する人材のコースを作ってくれる。これはデジタルのコースを各大学で、新学科を作ってほしいとお話しして、愛媛大学と松山大学と人間環境大学と、松山東雲女子大学四つが、来年以降順次、デジタルの新学科を創設することになりましたので、そういった人材の育成にも、私学も巻き込んで取り組んでいきたいなと思っています。何か今のことで、学校の先生方にお聞きしたいのですが、いかがでしょうか。

(北宇和高校教員) ソーシャルチャレンジの方を担当させていただいております。地元に泉貨紙という和紙が伝統的にありまして、漉く段階で二枚に重ねて強度を増しているのですが、御手元にございます封筒の中を開けていただきましたら、馬のスタンプがある紙が、鬼北町で作られている泉貨紙です。そこに押しているスタンプは生徒が作りました。消しゴムハンコを彫りまして生徒が作ってくれました。このように、地域に素晴らしい資源があるということに気付いてもらいたい。知ってはいっても、身近なところに感じるということが今まであまりなかったので、本校にちょうど生産食品科の方で、原料となる楮の木も植えております。そういう紙にする材料を研究するということもやっておりますので、私たちはその紙を加工して何かに使えないかと有効利用しようということを考えてスタートしたのが3年ぐらい前です。そこで馬術部、やはり

本校の魅力でもありますので、そこと連携していくことも大事かと思ひまして、点と点ではなくてそれがつながっていくと、地域と学校が結びつくというふうに考えて、馬と和紙を結びつける活動をさせていただいております。ただやっている人間だけが分かっている、魅力を感じてもらえないので、全校的な活動にするために、今年度予算をたくさんつけていただきましたので、馬術部で使える道具も買わせていただきましたし、著名な先生に来ていただいて、全校で講演を聞ける機会を設けることができました。

先日、「伊予灘ものがたり」が予土線に乗り入れした際にも、おもてなしをさせていただいて、いろんな物をお配りさせていただきましたが、その時のアナウンスも車内でさせていただきまして、非常に生徒が生き生きとしており、お褒めの言葉をいただいたと、非常に達成感、有用感を感じておりました。地域に根ざした活動をして、自分の個性を發揮しながら、いろんな方の手を借りながら、というところが生徒の成長につながっております。これに関しては地域おこし協力隊の方にも御協力いただいておりますし、泉貨紙保存会からもたくさん御支援をいただいておりますので、連携ができてきているかなという感じですが、これも、今後もっと全校的な活動に広げていきたいと思っております。

(中村知事) はい、ありがとうございます。ほか、いかがでしょうか。

(北須賀委員) 今日は、馬術部の活動を拝見しました。北宇和高校の馬術部は、動物と共に活動する県内唯一の運動部活動であると聞いております。生徒たちの活動の様子を拝見しましたけれども、生徒たちは馬との触れ合いを通して、豊かな心を育てているように思います。そして運営にあたっては、地域の方が、指導者として御指導いただいているほか、地域後援会の設立、あるいはスポーツ少年団との連携といったものにも見られるように、非常に地域とのつながりが強く、地域と一体となった、いわゆる持続可能な運営体制が整えられている、本当に優れた取組だと感じました。

また、県内には、こういう北宇和高校馬術部の他に、先ほどもお話がございましたが、長浜高校の水族館、それから三島高校のフェンシング、松山東・今治西・今治西伯方分校の俳句など特色ある部活動が見られませんが、こうした地域に根ざした部活動を育成し、更に積極的に発展させていこうというのは、高等学校の魅力化を推進していく上で非常に重要なことだと思います。

(中村知事) 部活動は生徒さんたちにとって本当になくってはならない存在だと思いますし、僕自身ずっと運動選手だったので、あまりにもそちらに没頭しすぎて全然勉強しなかったのだけど、本当に忘れられない青春時代で、そこで得た人間関係、友情は今の卒業40年経っても、何ら変わることなく続いていまして、もう本当に財産ですね。そういう中で、学校にとっても、ある意味では文化活動でもスポーツでも、その存在は、

非常に大きな、みんなを横につなげる役割を果たすことになるのではないかと思いますし、それがなかったら学校生活がつまらないと思うので、是が非でもサポートしてあげたいなというふうに思っています。そんなことを自分は卒業してから40年経っても感じているので、現役の高校生がどう思っているのか聞いてみたいです。いかがでしょうか。

(北宇和高校生徒) 私はレスリング部に所属しているのですが、やはり全国大会に出場できた時や、試合で勝った時は、やっぱり仲間との友情が深まったり、さっきお話に出たのですが、社会の役に立つという部分も、仲間のために戦ったり、自分のためはもちろんですが、その辺でやっぱり、そのような考え方が芽生えるのではないかと思います。

(中村知事) でも、今あれだよ。部活動も僕らの時代は昭和の時代だから、あり得ないことがたくさんあったけれど、今はすごく合理的に練習のメニューなんかも考えられていて、それから先輩も後輩も一緒になって議論しながら、非常に理想的なトレーニングを考えているっていう、うらやましい限りです。僕らの頃は部室に、本当今考えるとばかばかしい話だけれど、「練習は不可能を可能にする」とだけ書いてあって、「これじゃ〜！」とやっておりました。でも、そんな時代だったけどもそれでも今でも財産だと思います。全国大会出場を果たしたので、大いにこれからまた更に高みを目指して頑張ってください。

(北宇和高校生徒) ありがとうございます。

(中村知事) ほか、いかがでしょうか。

(関委員) 今日、北宇和高校を見させていただいて、特に学校の魅力化、特色化ということが本当に大事だなと思いました。それをいい例えで作られていると思いました。とにかく地域の活性化のために魅力ある地域づくりをしていくということは、当然それをやる人材育成ということがまずどうしても必要だと思っています。

その人材育成のためには、やっぱり学校の魅力化、それから、特色化ということが必要だろうと。そして、その学校の魅力化、特色化のためには、やっぱり先ほど知事が言われたように、例えば長浜高校の例、三崎高校の例、そしてこの北宇和高校の例というのを挙げられましたが、特に踏まえておくべき、その魅力化、特色化のポイントというか、そういうことをどのように考えていくべきか、愛媛県にも高校はたくさんあるわけで、これからどんどん生徒を募集し、特色ある教育をしていくことが必要だと思うので、そういう面で知事が、どういうことをポイントにお考えかということをお聞かせいただきたいです。よろしくお願いします。

(中村知事) 僕にそんな能力はないですから。基本的に、行政の仕事をさせていただいている時に考えることは、まずその地域を知るっていうことですね。ですから、高校にとっても、その存在している地域、立地している地域がどういうところなのか、それは歴史もそうですし、文化

もそうですし、それから、産業もそうですし、そういった中から、それとリンクさせた高校の特色というものを考えていったらまずいいのではないかなと思います。

実は、日本の昔の言葉で言えば他人の庭はよく見えるので、あまり自分のことを知らないで、隣の芝は青くていいなとか、うちの町なんか大したことないよ、他の町の方がいいよなど、簡単に言う人が結構いるのですが、そんなことなく、やっぱり地域にはそれぞれの魅力がある。何と言うか、そこにやっぱり気付くということが学校現場でも必要じゃないかなと思います。だから、学校の先生にも今、愛媛のいろんな企業を紹介するパンフレットを配ったりですね、是非その地域の外に出て経験してほしいということをお願いしているのですが、そこから方向性が見えてくるのではないかなと思います。

あとはですね、やっぱり一つであることにこだわる必要はないけれど、ある程度絞ったほうが良いと思います。そこを絞り込んだ魅力っていうものを徹底的に磨くと全体が上がってきますから、これはマーケティング理論でもそうですが、やっぱりそこを徹底的に磨くっていうことが1つのアピールにつながるかなと思います。だから、今、長浜高校といえれば水族館ってなっていくんですよね、それはもう分かりやすい例で、宇和島と言えばじゃこ天ってなりましたけど、そういうものだと思います。やっぱり北宇和高校ならこれだっていう、今言った馬術は他の高校ではやっていないのがすごいですよね。別に馬術部の部員だけじゃなくて、いや、馬術部だけでなくレスリングも強いんだなど、そういうふうになっていくと思います。

特化して、その地域にあるものを見つける、それを導入する。そして、徹底的に磨きこむということが魅力づくりにつながるのかなと思います。学校現場はいかがでしょうか。

(北宇和高校教員) いろいろな子の発表を聞いていただいたら分かるかと思いますが、本校でもいろんな魅力的なことがたくさんあると思います。あと鬼北町にも魅力がたくさんあります。

実は月に1回ほど、学校と役場と公営塾、寮との間で、簡単な打ち合わせ会議、打ち合わせ会といいますか、今度こんなことしますよという情報交換会をやっているんですが、そういった中でお互いの情報を共有し合いながら、ここはこういうことがお互いできるねとか、ここは協力し合えるねというふうなことを簡単に約束しながらですね、取り組んでいることも実際やっております。

私たちが思うのは、そういう題材がたくさんあるんですけども、その題材を生かした生徒たちがいかに生き生きとそこで活動するのかというところがやっぱり大事なことだと思っているので、生徒たちがいきいき活動するためには、指導者側が、目線を下げるといいますか、いかに生徒たちにやる気を出させて、面白いものを行っているんだというふう

な気持ちを持たせるのかというのが大事なことだと思っています。

ですから、そこの技術といいますか、生徒にやる気を起こさせる技術を教員が磨いて、楽しく全員で取り組むことになれば、その魅力に更に付加価値がついて、良いものになるのではないかなというのが、考えとして思っております。

(中村知事) 楽しくやるってすごく大事で、僕らも今の仕事をやっていて、自分のできることなんか、たかが知れてますから、オーケストラで言えば僕はバイオリンを弾けるわけでもないし、サクスを吹けるわけでもない、知事という立場で指揮をとるだけなんですけども、それをその上で自分は何をやるかっていったら、間違いのない大きな方向性を考えるということ。

絵で言ったら、白いキャンパスの上に鉛筆で下描きを描くぐらいまでの力しかないんですよ。その次にやるべきことは、その下へいろんな考えに考えを積み重ねて到達したその下絵を、県庁職員だったら県庁職員に提示すると。提示して共有してもらおうという努力をします。

次に大事なことは今おっしゃったことで、そこに参加してもらうために、楽しい空気をどう作っていくか。そこまでいくと、あとは簡単で、もう自由に皆さんが絵の具を勝手に取って、塗り始めてくれますから、だから、まさに楽しそうな雰囲気はどう作るかって、いつも考えていることです。

まさに同じことなので、是非、子どもたちが自発的にこれ楽しいからやってみようかなと。

さっき言ったように、例えばPRの手法なんていうのは我々の世代では考えもつかないようなフィールドになっていますから、もうお前らに任せるといようなやり方もあるだろうし、いろんなやり方があると思うんですね。

特にPRする時っていうのは、対象をどこに持っていくのか、そのためにはその対象に響くようなものは何が必要なのか、媒体は何を使うのか。もういろんな考えるべきことがあるので、これなんかも絶対若者の方がいろんな面白いアイデアを出してくれるんじゃないかなというふうに勝手に思っていました。以上です。

では、ちょっと時間が押してしまったんですけども、今日はこのあたりにさせていただきたいと思います。また、今いただきました議論も、政策を考えていく上で一つ一つ活用させていただきたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

(事務局 副教育長) 以上を持ちまして、令和5年度愛媛県総合教育会議を閉会いたします。本日はどうもありがとうございました。

閉 会 (午後4時55分)